

地域に親しみ、地域に愛着をもつ子どもを育てる生活科学習指導

～体験活動や振り返り活動の工夫を通して～

八女市教育研究所
八女市立三河小学校
教諭 椀 眞一

1. 主題の意味

(1) 「地域(三河)に親しみ、地域に愛着をもつ子ども」とは

具体的な子ども像を次のようにとらえる。

地域に親しむ	地域に生息する動物や植物を手で触ったり、臭いを嗅いだり、人と触れ合いながら水や肥料をやったりして、地域がより「身近な」存在で、より「親しみやすい」空間になるように受け止めることができる。そしてさらに、知的好奇心・探究心を覚え、質の高い身体の振る舞いなどができるようになる。
愛着をもつ	友だち、そして高齢者などの地域の人たちのよさを認め合い、そのよさを生かし合って共に生活や学習ができるようになる。つまり、地域そのものが、かけがえのない存在となり、友だち、そして高齢者などの地域の人たちと共生していこうとする心を持つことができるようになる。その中で、問題解決・試行錯誤を経て、創意工夫を行い、共に生きようとする。

子どもたちが地域の一員であるという自覚を持ち、行動するために、地域を知り、地域のことに学び、地域に働きかけていく上で大切な指標として、次の3点を挙げる。

もの	自然・文化や人々の生活、地域の施設など
ひと	専門的知識・技能などをもつ人材
こと	歴史的な諸活動や文化的諸活動、伝統的行事など

これら、地域の「もの・ひと・こと」に主体的に関わりながら、感動を抱かせ、取り組ませていきたいと考える。

(2) 「体験活動や振り返り活動の工夫」とは

体験活動とは、例えば、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして直接、子どもたちが対象に働きかける学習活動であり、その楽しさやそこで気づいたことなどを言葉、絵、動作、劇などによって表現する活動である。そういった活動の工夫とは、子どもが選択したり、子どもにとって意外性があったり、興味・関心を起こしたりして主体的に取り組むことが期

待できるように仕組むことである。

振り返り活動の工夫とは、試行錯誤や失敗体験等の自己評価をもとにして、子どもの願いを重視した単元構成を工夫することであり、しかもその振り返り活動が連続・発展するように仕組みたい。

2. 主題設定の理由

(1) 児童の発達段階から

本校の子どもたちは、素直で明るく純粋な子どもが多い。しかし、全国的な傾向ともいえるテレビゲームなどの室内遊びが多く、人と人との交わりや自然との関わりが希薄になっている。

それらの点をふまえて、本校の総合的な学習との系統性をも考慮し、低学年段階において、地域に親しみ、地域に愛着をもたせる素地を育みながら、知的好奇心や探究心を養っていくことが大切であると考える。

(2) 生活科の本質から

生活科は、具体的な活動や体験を通して自分と身近な人々、社会及び自然(地域の環境)と関わり、自分や友達のよさに気づいてよりよい生活をしていこうとする自立への基礎を養うことをねらいとしている。また、具体的な活動を通して思考するという発達特性をふまえて直接関わる活動や体験を一層重視し、創意工夫のある生活科学習指導の充実を求めている。

(3) これまでの指導の反省から

上記にも挙げたように、生活科では具体的な活動や体験を通すことが重視されている。これまでの指導を反省し、もっと子どもと生き物、子どもと周りの人たちとの関わりを重視し、双方向性のある体験活動と振り返り活動の指導の工夫が必要であると考える。

3. 研究の目標

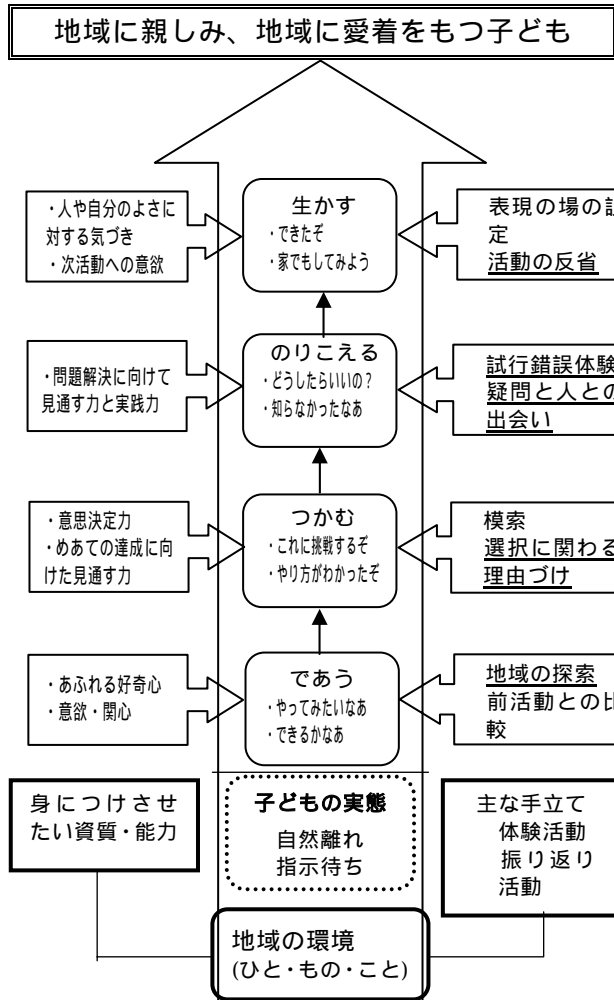
地域に親しみ、地域に愛着をもつ子どもを育てるための単元構成のあり方を究明する。

4. 研究の仮説

「であう」「つかむ」「のりこえる」「生かす」といった学習過程を設定し、以下の工夫をすれば、地域に親しみ、地域を愛する子どもを育てることができるであろう。
 地域への関わりを重視した体験活動
 対象との関わりをもとにした振り返り活動

< 研究構想図 >

〔めざす子ども像 = 自立への基礎を備えた子ども〕



5. 研究の実際と考察

(1) 学習指導の実際と子どもたちの反応からの考察

単元名 『ぐんぐんのびろ』～野菜パーティーへ招待しよう～

< 単元構成 > (20 時間計画)

学習段階	学習活動	体験活動	振り返り活動
であう	1. 夏野菜づくりについてふりかえる 2. 地域の野菜畑の様子を観察する 3. 夏野菜畑をどうするか話し合う	地域の畑のものに五感を通して触れ合う	夏の活動を振り返ると共に、今後の活動を見通す
つかむ	4. 課題について話し合い、決定する 5. 計画について話し合う	種や育った様子の写真を見る	自分のこだわりをもつ
のりこえる	6. 野菜づくりの方法について調べる 7. 土づくりや植えをする 8. (大切に育てる)	新たな方法で、自分たちで野菜を育てていく	問題解決で援助してくれた人のよさに気づく
生かす	9. 野菜パーティーに向けた具体的な内容や方法を考える 10. 野菜パーティーのための準備をする 11. 野菜パーティーをする	野菜を育てた喜びなどを劇や紙芝居などに表現する	野菜を育てた経験や表現による自分の成長を振り返る

ア. 「であう」段階(実施時期 9月の初旬)

ここでのねらいは、野菜の種類に関心を持ち、野菜づくりに意欲を持つことができるようにすることである。

体験活動

子どもたちは、春の校区探検の時に、地域の野菜畑の様子を観察している。そこでこの時期にも地域の野菜畑の様子を観察し、春からの畑の様子の変化を感じさせるとともに、今、植えられている、または、これから育てようとしている野菜の種類に関心を持たせながら、野菜づくりの意欲へつなげたいと考えた。

< 資料 1 >



畑の広さを確かめる子ども



野菜の感触を確かめる子ども



インタビューする子ども

子どもたちは、資料1の写真にもあるように、地域の畑を見て回ることによ

り、畑の広さを確かめたり、その時期に育てられている野菜そのものをさわって実際の感触を確かめたりするなどの体験を行った。さらに写真のように、これから育てようとしている多様な野菜にも目を向け、地域の人にインタビューをしながら野菜づくりへの興味や関心を持つことができていった。

振り返り活動

<表1> アンケート結果

振り返った内容	夏の野菜づくりから	9月の校区探検から
同じ野菜を作りたい	7	6
違う野菜を作りたい	15 (S児) →	19 (S, T児)
もう作りたくない	0	0
どちらでもよい	4 (T児) →	1

この段階では、表1のように体験活動について振り返らせるとともに、前回の野菜づくりについても振り返らせた。その結果からもわかるように、まず、「今度は違う野菜を作りたい」という項目に関しては、この校区探検を通して、いろいろな野菜への関心が高まっていると言える。次に「どちらでもよい」という項目に関しても、野菜づくりに対する意欲の表れだと捉えることができる。

この調査結果の中で、家でも野菜づくりの経験があるS児は、今回の学校の野菜畑を使った体験に対してとても意欲的なことがわかった。またT児は、他校(他地域)からの転校生であり、夏の野菜づくりが終わってからの調査では無関心な面があったが、校区探検を通して、多様な野菜づくりに対する意欲が少しずつ見え始めた。そこで、この調査結果をもとにして、学級全体の傾向に目を向けていくとともに、S児とT児の様子にも目を向けながら主題にせまっていきたいと考えた。

Ⅰ. 「つかむ」段階

ここでのねらいは、いろいろな野菜の中から育てる野菜を焦点化することにより、「知的な好奇心」を持たせるとともに、自分がどんな野菜を育てたいかということやそれをどうし

たいかなど、自分の思いや願いをしっかりと持つことができるようにすることである。

体験活動

「できるだけいろいろな種類の野菜を育ててみたい」、それが子どもたちの率直な思いである。そんな子どもたちの思いや意欲を大切にしたいと考えた。(事前に地域の農協に出かけ、この学習の意義などについて職員の方に説明を行なっておいた)ところが、子どもたちの自主性を尊重しようとするれば、いくつかの条件が必要になってくる。それはまず、「収穫時期(11月初旬)が合っているもの」、次に「比較的育てやすいもの」である。その2つの条件を満たす野菜として、『はつか大根』・『人参』・『大根』の3つが挙げられた。そこで、子どもたちに3つの野菜の写真と種を見せることにより、自分が育てたい野菜を選択させた。その結果、T児もS児も『大根』を選択した。2人とも、大根の種を観察することにより、下記のような感想を持つことができた。

<資料2> T児とS児の野菜日記より

たねが赤むらさきなんていりませんでした。
T児

「ほくほく」サイズのたねよりか、かいとおもていまして、大きいこのたねは、かんぱいにかいこいかなんていりかくなるとは、ふもいませんでした。
S児

T児は種の色に、S児は種の高さに目を向けていることから、2人とも「知的気づき」を生むための「知的な好奇心」が芽生え始めていると言える。

振り返り活動

<資料3> T児の振り返りカードより

おいしいからです。それとそれがです。それからです。

S児の振り返りカードより

おいしいからです。それとそれがです。それからです。

前ページの資料3は、T児とS児の『大根』を選択した理由である。T児の内容からは、味わったことがある経験と、これから育てようとする意欲が窺えるし、S児の内容には味わったことがある経験を述べていることがわかる。更に発展して、T児は「みんなで祝いたい」という気持ちを持ち、S児は、「食べたい」という願いを強くもっていった。

このようにT児もS児も、この振り返り活動を通して、野菜(大根)に対して、自分なりの思いや願いをもつことができたと言える。また、それらが自分たちの野菜に対する「こだわり」でもあると言える。T児やS児に限らず、他の子どもたちも同じような思いや願いをもつことができた。そしてそれらを大切にしながら、学級全体の学習のめあてとし、野菜づくりに対する意欲を継続させることができたのは、振り返りカードによる刺激が有効に働いたものと考えられる。

ウ.「のりこえる」段階

ここでのねらいは、自ら進んで世話を続けたり、友だちのよさや、栽培に関わってくださった方々などのよさに気づいたりしながら、自分たちの失敗をのりこえ、新たなめあてに気づくことができるようにすることである。

体験活動

<資料4>



土の感触を確かめる子ども



育たなくなった原因追求



畑の土に直接植える作業

子どもたちは自分が育ててみたい野菜を選択し、同じ仲間どうしが一つのグループになり、野菜づくりを開始していった。

まずは、苗づくりの作業である。資料4の写真のように、「ペーパーポット」という容器に土を入れていきながら土の感触を確かめていった。(ただし、ここで使用した土は、事前に肥料が混ぜてあるものである)なぜポ

ットどうしがくっついているのか、ポットの中にはどれくらいの量の土を入れたらいいのかなどと子どもたちはたくさんの素朴な疑問を投げかけてきた。

苗を育てるための最適な場所を確かめたり、水やりもしっかりと行なったりしたはずの野菜づくりに最初の困難がおとずれた。資料4のは、苗がうまく育たなくなった原因を追究するために、H氏にそれについて尋ねている場面である。H氏は同じ三河区内に在住され、学校業務にも携わっておられる方である。また、野菜づくりにも詳しく、子どもたちにも親しみやすい存在である。子どもたちはH氏の言葉にしっかり耳をかたむけながら、自分たちの世話の仕方を反省したり、育てることの難しさをこの体験を通して感じ取っていったりした。そして資料4のように、H氏の指導により畑の土の中に、直接種をまいていく作業を行っていった。

今度はうまくいき、芽が出た。子どもたちは、自分たちの野菜を育て、観察していく中で、資料5のような、植物への水の与え方について、気づくことができた。

<資料5> T児の野菜日記より

だいごんのたねをうめるまえに水をいれるなんていってませんでした。

11月から水をやらないのにすごく大きくな。ていたのでびっくりしました。

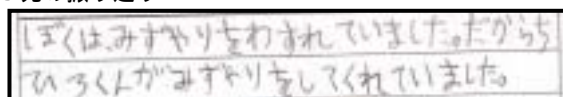
このころから子どもたちは、野菜に関する本を図書室に行って探し始めたり、わからないことがあったらH氏に尋ねようとしたりするなどの活動が活発になり、探究心をもつようになった。

子どもたちに疑問が生じ、その解決方法を自分たちで学ぶことができたのは、失敗経験が有効に働いたからではないかと考える。

振り返り活動 <資料6> T児の振り返り

お母さんや先生の話を聞いて、まじごんのことなどやさしくお話をくれたところがいっぱいです。

S児の振り返り



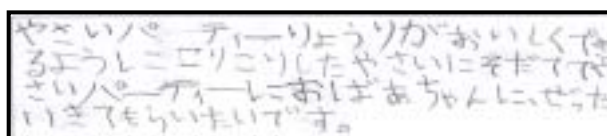
しぼくはみずやりをわすれていました。だから
ひろくんがみずやりをしてくれました。

子どもたちはまた、「ひと」との関わりの中で、いろいろなことに気づくことができた。

H氏が野菜づくりに詳しいということもそうであるが、資料6のS児の内容からは、水やりを忘れていた自分の反省とともに、友だちの存在の大切さに気づいていることがわかる。T児の内容からは、「間引き」指導のためにG・Tとして来校してくださったA児やS児の祖母のやさしさを感じ取っていることがわかる。

またS児は、この「間引き」指導をきっかけにして、「間引き」が野菜の成長にとって不可欠であることを自分なりに理解し、それまで以上に野菜の世話を進んで行うようになった。

<資料7> S児の振り返りカードより



やさしい、パーティーリョウリがおいしくや
るようしニコニコしたやさしいをきいて
さいりパーティーにおばあちゃんにぜひ
いきてもらいたいです。

そしてさらに、上の資料7の内容のように、「つかむ」段階でのS児の「食べたい」という思いから、「おばあちゃんに来てもらいたい」という思いに深まっていったことがわかる。

子どもたちが、自分の思いや願いをより深めていくと同時に、次からの活動に対する意欲を増幅させることができたのは、振り返りカードを通して「ひと」との関わりを見つめ直し、自分と他者とのつながりやそのよさなどに気づくことができたからではないかと考える。

エ．「生かす」段階

ここでのねらいは、野菜づくりを通して気づいたことや思ったこと、考えたことなどを自分なりに考えて表現しながら、自分の成長に気づくことができるようにすることである。

体験活動

まず子どもたちは、パーティーの中で、自分が「どんなことを、どんなやり方」で表現したいのかということについて自己決定していった。S児は、「水やりを中心にうまく育てた様子を、劇で」表現することにした。

<資料8> アイディアを表現するS児

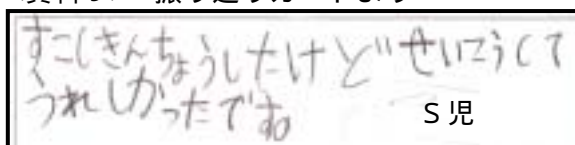


上の写真は、S児が、「野菜(大根)が大きく成長する」ところをビニルぶくろや紙コップ、ストローを使って表そうとしている(主張している)ところである。どうすれば劇を観る人たちにわかりやすく表現できるかを自分なりに考え、身近な材料を活用して作ることができた。資料7の振り返りカードにあるような「おばあちゃんに、パーティーにぜひ参加してほしい」という強い願いがあったからこそ、このようなアイディアを生み出すことができたのではないかと考える。

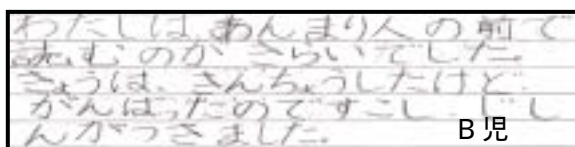
この他にも、「野菜が育つ様子を、クイズを使って」表現しようとしたグループは、新たに生じた疑問を、クイズの内容にするために、わからないところをH氏に尋ねる場面も見られた。

振り返り活動(表現活動を終えての感想)

<資料9> 振り返りカードより



すこしきんちゅうしたけどせいに
つれしかったです。 S児



わたしはあんまり人の町で
遊ぶのが好きでした。
さうは、きんちゅうしたけど
かんはったのです。しじ
んがつきました。 B児

上の感想内容からは、短文ではあるが、表現活動を終えての成就感を窺うことができる。

さらに、自分が成長しての喜びや、人前で発表する時の緊張感を味わったこと、またそれを乗り越えることができた自信を窺うことができる。

このように子どもたちは、一人ひとり自分をよく見つけ、自分自身を素直に評価することができたと考える。

(2)全体考察

<表2> 学習前と学習後のアンケート結果

アンケート	学習前	学習後
三河がとてもすき	20(S児)	20(S児)
(主な理由)	友だちがいるから 友だちとゲームができるから べんがら村があるから 矢部川がすきだから 学校にプールがあるから 遊ぶものがたくさんあるから	野菜づくりのことをHさんやおばあちゃんがやさしく教えてくれたから(6) 野菜が育てられるから 畑にすごいものがあるから。畑が広いから 家の近くに畑があるから 友だちがやさしいから いなかでのんびりしているから
三河が少しすき	6(含T児)	6(含T児)
三河がきらい	0	0

上の表2は、「三河(子どもたちにとっての地域)がすきですか。」という問いに対する回答結果である。数値的に見てみると、学習前も学習後も全く同じ結果であるが、「三河がとてもすきである」理由を見てみると、学習前は、地域における「ひと」や「もの」などの存在を漠然と理由に挙げているだけであったが、学習後では、野菜づくりへの関わりの中で、地域の「もの」に感動したことや「ひと」のやさしさなどに触れたよさなどを感じていることがわかる。そこで、このような結果の変容の要因を考察すると――

右上の表3は、各学習段階での、子どもたちの反応をキーワードで整理したものである。体験活動から振り返り活動へ、そして更に次の体験活動へと子どもたちの活動が連続・発展的になってこの学習を進めることができた。それは、子どもたちが、体験活動の中での思いや願い、感じたこと、意欲を示した芽を大

事に取りあげていったためではないかと考える。

<表3> 連続・発展する子どもたちの意識図

留意点 学習過程	体験活動	振り返り活動
であう	野菜づくりに対する興味・関心	野菜づくりに対する意欲
つかむ	野菜の種への知的好奇心	こだわり(自分の思いや願いをしっかりと持つこと)
のりこえる	野菜づくりへの探究心	深まる願いや思い
生かす	生み出されるアイデア	成就感や自信

またこの学習の中で、種から芽が出なかったりして十分に育てることができなかった失敗を子どもたちは体験した。しかし、H氏やA児のおばあちゃんとの出会いを通してその失敗をのりこえることができ、「自分たちが育てた野菜を食べたい」、「パーティーを開きたい」という願いを達成させることができていった。

このようなことから「地域に親しみ、地域に愛着をもつ子どもを育てるための単元構成のあり方」とは、子どもたちの思いや願いを重視し、持続させるための工夫を行ったり、各学習段階の中で、地域の「ひと・もの・こと」との出会いの仕方を工夫したりすることではないかと考える。

6. 研究のまとめ

成 果	「地域に親しむ」という面で、知的好奇心・探究心が芽生える中で、「ひと」と触れ合うことの大切さがわかった。 「愛着をもつ」という面で、自分たちがしてきたことを「ひと」に伝えたいという思いが強くなり、「共生」していこうとする心をもつきっかけができた。
課 題	「地域に親しむ」という面で、野菜畑を地域の中に位置づけて栽培させるなど、もっと「身近な」存在になるような取り組みを行う必要がある。

参考文献

小学校学習指導要領解説書 生活科編 文部省(11年5月)
生活科の手引き『生活科の授業づくりのために』県教委(7年3月)
対談『生活科の授業をどう創るか』明治図書(11年6月)

